

第217回 番組審議会

1. 日 時 平成24年11月13日 (火) 12:00～
2. 場 所 メトロポリタン盛岡NEW WING 3F「星雲 東の間」
3. 委 員 委員総数 12名
出席委員数 12名 (欠席委員数 0名)

○ 出席委員 (敬称略)

中村 慶久 (委員長)
竹中 陽一 (副委員長)
—以下50音順—
木戸場美代子
久慈 浩介
斎藤 純
斎藤 雅博
東海林 千秋
菅原 正二
原 圭介
八木橋 伸之
役重 真喜子
吉田 浩次

○ 会社側出席者 (4名)

佐藤 滋樹 (代表取締役社長)
小原 忍 (専務取締役)
藤澤 利憲 (常務取締役)
藤原 銀司 (取締役営業局長)

○ 事務局 佐々木 久仁子

4. 議題

「娯楽としてのテレビの役割、最近のソフト事情について」

フジテレビ総合メディア開発コンテンツ事業局

コンテンツ映像センター室長 片岡 飛鳥 様

5. 議事概要

今回は、フジテレビの総合メディア開発コンテンツ事業局の片岡飛鳥・コンテンツ映像センター室長を招いて、「娯楽としてのテレビの役割、最近のソフト事情について」の演題で講演いただきました。議事の概要は以下の通りです。

● フジテレビ総合メディア開発コンテンツ事業局コンテンツ映像センター室長片岡飛鳥様のお話

- ・ フジテレビのバラエティの定義は、『より多くの人々や、ひいては社会を幸せな気持ちにするための番組』である。このことが、フジテレビがバラエティを作る時にたどり着かなくてはならない使命であり、事業内容だと考える。

この場合の「人々」とは、視聴者だけではなく出演者、スタッフ、スポンサーまでを含めた人たちをいう。

- ・ 2010年春にフジテレビのバラエティは、こうあろうという宣言をした。
「愛がなければテレビじゃない」「安心できなきゃテレビじゃない」「楽しくなければテレビじゃない」。愛情や安心があって初めて視聴者に楽しんでもらえるテレビができると考える。
- ・ テレビには、時代を超えた普遍性というものをを感じる。「記憶に残る」というのは、テレビメディアの特性で、見てくれた人たちの記憶に幸せなものとして残りたいという思いで番組を制作している。

- ・ 「愛情」を持って番組を制作することが番組を長く続ける秘訣。視聴者をバカにしたような目線で番組を制作しないこと、番組の中に裏切りがないことが絶対である。
そして「真面目であることが大事」である。フジテレビは、昔から真面目にふざけることをやってきたテレビ局。真面目さという部分では全くブレていないのがフジテレビのバラエティだと思う。
- ・ バラエティの正解とは「その時代その時代の視聴者に受け入れられること」である。視聴者の反応が時代とともに変わり、物の見方は時代とともに成熟する。作り手側にネガティブな感情があったら瞬時にチャンネルを変えられてしまうだろう。
- ・ 「コンテンツ」という言葉は、今後、より多くの人々が共有する言葉になるだろう。コンテンツを一言で言うと「面白い一個の塊」。「面白い塊がある番組」が優秀な番組である。今後は、強力なコンテンツを複合的にメディア展開することがポイントとなるだろう。

6. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置

特になし

7. 審議機関の答申意見概要を公表した場合におけるその公表内容、方法及び年月日

* 平成24年11月14日（水） 産経新聞 東北版

* 平成24年11月24日（土）午前4時42分から4時45分まで「めんこいテレビ 番審りレポート」内で放送

* 据え置き書類を作成し、本社受付に置き一般の人々が自由に閲覧できるようにした

8. その他の参考事項

特になし

以上